

幼児の運動感覚から考察するマット運動の基礎的な指導法

Basic Method of Teaching of the Mat exercises Considered from children's Movement Senses

次世代教育学部こども発達学科

川瀬 雅

KAWASE, Miyabi

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

次世代教育学部こども発達学科

趙 秋華

CHO, Chuhwa

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

要旨：本研究では、マット運動における一般的な「子どもの姿」を明らかにすることを目的に子どもに対して聞き取り調査を行った。また、一般的な「子どもの姿」と大学生が想像するそれに違いがあると想定し、その差を検証するために大学生に質問紙調査を行った。その結果、大学生が考えるマット運動において子どもが感じる恐怖心の諸因は、①失敗した時のことを考える。②地面から離れて回る。③逆さまや後ろなど見えない方向へ動くこと。④初めての運動のとき。以上4つが挙げられた。また、動作及び局面に関して大学生は、幼児が「回転」という動作に恐怖を感じると予想した。実際のところ、子どもは「恐怖心を感じていない」と回答する者が多く、恐怖心を訴えた子どもは「頭が床につくこと」が怖いと回答した。この結果から、マット運動における前転及び後転の動作開始時には、頭部が保全される補助方法及び頭部が床に着くことの不安を和げることができるような指導言葉が有効だといえる。

Abstract：We did inquiring survey for children to find out the “child’s general form” in the mat exercises. And, did questionnaire survey for college students to verify the image of a child form in the mat exercises by the college students.

As a result, the college students expected 4 situation by which the children feels fear by a situation of mat exercises. (1) Children thinks when they failed. (2) Children goes around separately from the ground. (3) Moving to the direction of reverse and back aren’t seen. (4) At the first movement. A college student expected that an infant was afraid of movement as “revolve” about movement and the phase.

There were a lot of actual places and persons who answer that a child didn’t feel fear, and I answered that the child who complained of fear was afraid of “The head goes to floor.” As a result support method by which a head is preserved and anxiety of a head’s arriving at a floor can say that an eased guidance word is effective at the time to starting movement of forward somersault and backward somersault.

キーワード：マット運動の指導法, マット運動時の指導言語

Keywords：support method for mat exercises, guidance word for mat exercises

I. 緒言

I-1. 幼児教育における運動指導の現状

子どもの基本的な運動能力が低下していることを受けて、その現状を改めるべく平成24年3月に文部科学省が「幼児期運動指針」を策定した。幼児教育全体に

おいてはこの指針を参考にして、幼児期に運動に親しみ、多様な動きを獲得することができる環境や活動を整備している段階にある。

幼児教育における運動指導は、所属園の幼稚園教諭或いは保育士が行うこともあるが、民間企業のサービスを導入する園が多くなっている（スポーツ庁、

2019)。吉田ら（2014）は、運動指導者の有無と運動指導者の属性を調査した。その結果、一斉保育を行なう際に幼稚園教諭以外の運動遊びのみを指導する指導者（以下、運動指導者）がいると回答した者が64.1%で、そのうち外部から指導の時間だけ派遣されるケースが73.1%と最も多く、なかでも私立幼稚園と私立認定こども園の割合が有意に高いことを報告している。

運動指導者有群は、運動指導者の指導も含め、園で行われている運動遊び指導全般に対する満足度が高いこともあげている。一方で、運動指導者がいない園においては、保育者自身が指導計画と指導内容を考案する方法が求められよう。また、保育士養成の段階から上記のような技術を身に付けることが必要だといえる。

実際に、運動指導及び運動遊びでは鬼ごっこやボール遊び等の集団遊びからマット運動、跳び箱など体育の専門知識が必要なものが混在しており、幼児教育の現場では幼児の発育発達段階の理解と運動指導の知識が求められる。清ら（2018）は保育者34名を対象にアンケートを行い、運動場面の調査を行った。その結果、鉄棒に取り組んだという事例が14例と最も多かったことを報告している。このように、幼児教育の現場では遊具を使って器械運動に取り組む事例も多く存在している。保育者が器械運動の特性や危険性を把握し、安全で効果的な指導法を理解することが必要だろう。

I-2. 指導不安と子ども理解

上記したように様々な工夫のもと運動指導が行われている背景もあり、幼児の運動遊び及び幼児体育の指導方法に関する研究は予てより多くの報告があるが、ほとんどが教材研究に関する研究報告であり、指導者の視点に立ち、幼児理解に関して報告する研究は少ない。

しかし子どもと関わるときにはある程度の幼児理解に関する知識が必要である。指導する際の指導案を作成するときには必ず「子どもの姿」を記述することから始まり、それによって「ねらい」を立てて活動内容や保育者の援助を行わなければならない。一般的な幼児の姿や、対象の理解がなくては「子どもの姿」を記述することができないのである。逆にいえば、指導計画は「子どもの姿」から始まるため、一般的な「子どもの姿」を把握することは指導案作成の負担を軽減するといえる。

しかし、保育士養成校に所属する学生にとっては

「子どもの姿」を想起することが難しいのである。室井ら（2018）は、保育士養成校に所属する学生は「子どもの姿が想像できない」ということを自覚しており、それが課題となっていることを報告している。葉原ら（2017）は、指導案を書く際に現場を知らない学生にとって保育を想像して記述していくことの困難さをあげている。また、これは、経験の少ない保育者や、運動指導を専門にしない保育者にも同様だといえるだろう。

清水らが実施した研究（清水ら、2019）は、対象が小学校教員ではあるが、マット運動を指導することについて約45%の教諭が「難しい」と回答したことが報告されている。先に述べたように、体育の専門的な知識が必要な難しさが現れていることが推察できる。

上記してきた背景から、本研究では、体育の専門的知識が必要とされる運動のなかでもマット運動を取り上げ、その運動における幼児の運動感覚を明らかにすることで「幼児理解」を深め、指導方法を提供することを目的とする。幼児は、恐怖心が払しょくできないことから、運動への機会を失ったり、誤った方法で運動を実施するなどして傷害に繋がるといった問題があげられるが、恐怖心の出現条件を整理し、それが解決される指導方法が実践されることで上記した問題が改善される見込みがある。

II. 調査方法

幼児体育指導で実際に行われるマット運動の基本的な技である前転・後転・側転における動作を3つの局面（準備・主要・終末）に分類し、幼児はそれぞれの運動において、どの局面の動作に最も恐怖心を感じると思うかについて大学生と子どもを対象に調査した。

II-1. 大学生を対象にした調査

被調査者①は、I大学の保育士養成課程に所属する1年生75名である。何らかのスポーツ経験がある者は、62名であり、全体の83%だった。この集団への調査は質問紙での回答を求めた。

質問1は、「幼児がマット運動に取り組むとき、どのようなことに恐怖心を感じると思うか」について自身の考えを記述するよう求めた。この記述回答は全てデータ化し、そのファイルをKHcoderで前処理を行ったのちにクラスター分析を行った。総抽出語は1008語で、異なり語数は179だった。質問2は、「幼児がマット運動におけるどの局面の動作に最も恐怖心を

感じるとするか」問い、当てはまる項目に丸を付けるよう指示した。この回答はデータ化し、1つの丸を1ポイントとして項目に対するポイントを計上した。その数値を項目ごとに回答者数と比較して割合を示した。

II-2. 子どもを対象にした調査

被調査者②は、〇市在住の子ども（3歳から8歳）23名を対象にした。全員が週に1度スポーツ系の習い事を行っている。この集団への調査は、被調査者①への質問2に示した技のうち前転と後転を対象にして、技を実際に行うときに個別に聞き取りをした。技の実施は体育館で体操用マットを敷いた状態で行った。

まずは前転の姿勢を取るよう指示し、技に対する恐怖の有無を「何か怖いことはある？」と問いかけて確認した（確認1）。この質問に「怖いことはない」と回答した被調査者にはそのまま前転を実施させた。確認1のあと「怖い」と回答した被調査者には、「何が怖い？」と問いかけて恐怖心の対象を確認した（確認2）。また、確認1で「怖いことはない」と回答したあとに前転を行ったができなかった被調査者には、「何か怖いことはあった？」と確認した（確認2）。確

認2の回答があった後に「他に怖いことはある？」と問いかけて再度確認した（確認3）。後転についても前転と同じ方法で行った。

III. 結果

III-1. 大学生が考える子どもの姿

まずは、大学生（被調査者①）の記述から、大学生が考える幼児の運動感覚について確認する。大学生に対して質問1「幼児がマット運動に取り組むとき、どのようなことに恐怖心を感じると思うか」についての記述における抽出語リストは表1の通りで、「回る」、「回転する」という語が上位である。この抽出語をもとにクラスター分析を行った結果は、図1の通りである。これによると、大学生が考える幼児の恐怖心の諸因は、①失敗した時のことを考える。②地面から離れて回る。③逆さまや後ろなど見えない方向への注意。④初めての運動のとき。以上4つである。

次に、質問2から、大学生は幼児がマット運動におけるどの局面の動作に最も恐怖心を感じると予想したか確認する。結果は表2に示した。前転では主要局面が、後転では主要局面のうち「後ろに回転する」動作のポイントが高かった。この回答は、質問1の記述結

表1 抽出語リスト

#	抽出語	品詞/活用	頻度
田 1	回る	動詞	15
2	回転	サ変名詞	14
3	マット	名詞	12
田 4	見える	動詞	12
田 5	感じる	動詞	9
6	恐怖	サ変名詞	8
7	後ろ	名詞	8
8	前	副詞可能	8
田 9	打つ	動詞	7
10	思う	動詞	6
11	地面	名詞	6
12	倒立	サ変名詞	6
田 13	怖い	形容詞	6
14	逆さま	形容動詞	5
15	自分	名詞	5
16	失敗	サ変名詞	4
17	周り	名詞	4
田 18	転がる	動詞	4
田 19	倒れる	動詞	4
田 20	落ちる	動詞	4
21	運動	サ変名詞	3
田 22	考える	動詞	3
23	初めて	副詞	3
田 24	付く	動詞	3
25	補助	サ変名詞	3
田 26	離れる	動詞	3
27	ケガ	名詞	2
28	下げる	動詞	2
29	距離	名詞	2
30	景色	名詞	2
31	後ろ向き	名詞	2

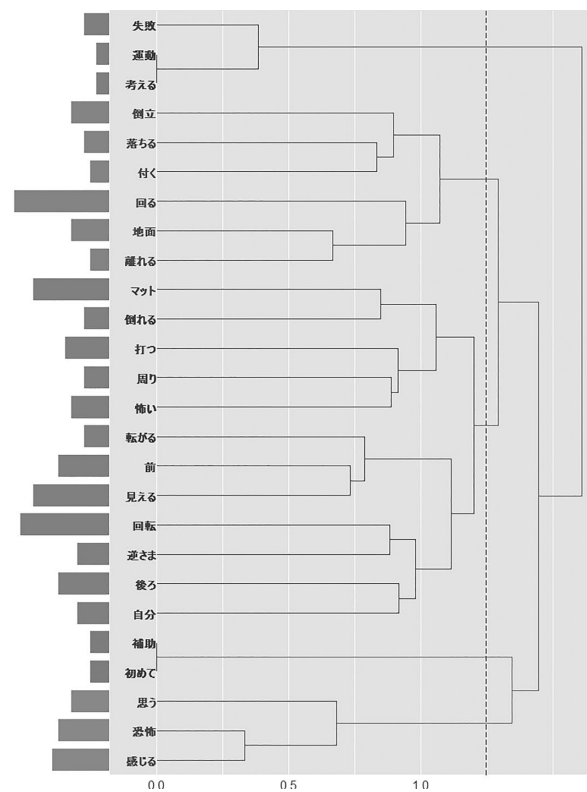


図1

表 2

項目	局面	観点	割合	ポイント
前転	準備	マットに手をついて下を向く	23%	17
	主要	両足を閉じて前方に回る	64%	48
	終末	回転後マットに手をつかずに立ち上がる	43%	32
後転	準備	後ろに転がる	75%	56
	主要	マットに手をついて脚を上げる	37%	28
	主要	後ろに回転する	91%	68
	終末	回転後にマットから手を離して立ち上がる	36%	27
側方倒立 回転	準備	両手をマットについて脚を蹴る	44%	33
	主要	脚を上上げて逆さまになる	91%	68
	終末	反対側に着地する	52%	39
倒立 ～ 倒立前転	準備	手をマットについて脚をける	48%	36
	主要	脚を上上げて逆さまになる	89%	67
	主要	逆さまのまま肘を曲げて床に近づく	85%	64
	主要	前方に回転する	69%	52
	終末	マットに手をつかないで立ち上がる	47%	35

n = 75

表 3

確認/動作		怖くない/できる	割合	怖い/できない	割合
前転	確認1	20	87%	3	13%
	前転	13	57%	10	43%
	確認2	19	83%	4	17%
	確認3	21	91%	2	9%
後転	確認1	19	83%	4	17%
	後転	11	48%	12	52%
	確認2	17	74%	6	26%
	確認3	22	96%	1	4%

平均年齢 5.13歳
n = 23

果とほとんど同じ傾向になった。質問1と質問2の結果から、大学生は幼児が「回転」という動作に恐怖を感じると予想しているといえる。

Ⅲ-2. 子どもの運動感覚の実際

前転に対しては87%の子どもが「怖くない」と回答した。しかし、実際に前転を行ってみると約半数が前転を行うことができなかった。確認2の時点で恐怖心があると訴えた子ども4名のうち3名が「頭を床につけるのが怖い」と回答し、他1名は「理由がわからない」と回答した。確認3で恐怖心を訴えた2名は、「前に転がるのが怖い」、「わからない」が1名ずつだった。

後転に関しても前転とほとんど類似した結果となり、83%の子どもが「怖くない」と回答した。確認2の時点で恐怖心があると訴えた子ども6名のうち4名が「頭を床につけるのが怖い」と回答し、「後ろに倒れるのが怖い」と「わからない」が1名ずつだった。確認3では1名が「わからない」と回答した。

上記のことから、子どもは前転や後転ができないものの、動作そのものを「怖い」とは感じていない可能性があるといえる。自覚する恐怖心は「頭が床につくこと」と訴えるケースが最多だった。

Ⅳ. 考察

サンプル数が少ないため、本研究結果が一般的な「子どもの姿」であるかは今後の課題となるが、これをひとつの結果としてとらえると、マット運動に恐怖心を感じた子どもたちは「頭が床につくこと」が怖いと訴えていたことから、マット運動に取り組む際には頭部が保全されるような補助を行うことが運動に対する恐怖心を和らげるために有効だといえる。

現行の指導法は、運動のコツを子どもたちに伝わりやすい言葉にして指導言葉としての有効性を検証したもの(須藤, 2018)や、つまずきとなっている動作を解消するために有用なトレーニング及び教材や補助方法は数多く提案されている。しかし、それらは運動実践者が気付かない動感を修正するためのものであり、顕在化された或いは潜在的な恐怖心を和らげるための指導言葉や補助方法の提案やそれらの有用性を検証した報告はない。

また、恐怖心があると訴える子どもよりも、恐怖心がないと訴える子どもの方が多かったことから、子どもたちは初めての運動などにそれほど恐怖心を抱いておらず、運動に対してできるか否かの判断が不覚のまま運動を始める可能性があるといえる。これにより保育者が警戒しなくてはいけないのは、運動中に予想し

ない事故が起こりうることである。

今後は、上記したような不安を和らげるような指導言葉や補助方法を考案し、その有用性を検証することが求められよう。実際の幼児教育の現場においては、子どもたちのほとんどが運動に対して「恐怖心がない」と思っていることに注意を払いつつ、運動に対して前向きであることも念頭において様々な運動が実践できる環境を整えるようにすべきである。

【引用・参考文献】

- ・室井眞紀子，桐川敦子著「指導案作成時に学生が感じる課題意識—映像視聴前後の変化についての検討—」帝京短期大学紀要，20：pp43-50（2018）
- ・菜原桂子，小林美華著「幼稚園教育実習・保育実習における指導案の現状と課題」北翔大学短期大学部研究紀要，55：pp139-145（2017）
- ・須藤晃平，前田晃宏，日高正博，後藤幸弘著「運動の指導言葉の有効性に関する研究—マット運動の前転を対象として—」兵庫教育大学教育実践学論集，19：pp255-264（2018）

【資料】

- ・趙秋華，川瀬雅著「保育者養成課程学生の運動指導における困難感—模擬授業を目的とした指導案作成を通して—」環太平洋大学研究紀要，15：（2019）
- ・文部科学省「幼児期運動指針」（2012）
- ・日本幼少年体育協会「幼児体育指導者検定公式テキスト2・3級」株式会社ハセガワ（2018）
- ・下山真二著「逆あがり とびばこ マット運動がたった一言であつというまにできる！」日東書院（2010）
- ・スポーツ庁「平成30年度スポーツ政策調査研究事業～幼児期の運動習慣向上好事例調査～」（2019）
- ・吉田伊津美，岩崎洋子著「園での運動遊び指導と運動遊び指導に対する幼稚園教諭の認識—エンデの運動遊び指導に対する満足度と技術指導志向からの検討—」発育発達研究，第64号pp18-24（2014）